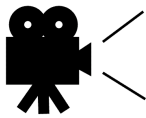


目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

暑中お見舞い申し上げます。蒸し暑い日が続いていますが、皆様いかがお過ごしですか？

私は、夢のごとく過ぎ去ったシティ・ライツ映画祭の後、半ば放心状態のまま5月を迎え、「音の城」音の海」の音声ガイドプロジェクトを組み、シティ・ライツ史上最短の2週間でガイドを仕上げ、6月に入ってからはやっと落ち着きを取り戻して、音声ガイド勉強会をスタートさせることができました。数えてみると、音声ガイド勉強会も、かれこれ22回目となるんですね。時の経つのは早いものです。

勉強会では毎回、初参加の方が何人かいて、新鮮な学びの場となるのですが、今回の勉強会は、初めての方が5名も参加してくださいました。実は5月の連休があけるとすぐに、埼玉県の方でも音声ガイドの講習会を行っていたのですが、こちらにもはじめての方が20名以上も参加し、音声ガイドづくりに取り組みました。「難しいけど楽しい！」ガイドづくりを続けている方は、皆、ロタにこう言いますが、はじめて音声ガイドに取り組みされた方々も、この先、音声ガイドづくりにハマって活動を続けていってくださるといいのですが…。音声ガイドは「作りこみ」形式と「ライブ」形式とありますが、「ライブ」形式の方も、埼玉県の若葉を拠点に活動する「声なびシネマわかば」というグループが、檀さんを講師に招いて、講習会を行います。

作り手（話し手）が増えれば、当然、その音声ガイドを生かす場も増やさなくてはならないのですが、そこはなかなか難しい問題です。映画会社をはじめとする業界へのバリアフリー化のアプローチは、シネマ・アクセス・パートナーズや、メディア・アクセス・サポート・センターという新しいNPO法人が、積極的に働きかけて下さっているので、新作日本映画のバリアフリー化はだいぶ進んだように思います。5月から蒲田の映画館では、最新の邦画を毎週日曜、どの上映回でも音声ガイド付きで鑑賞できるというのですから、すごいです。夢のような出来事ですよ。それに6月は「春との旅」や「座頭市」のように映画会社から提供されるバリアフリー興行が2本ありました。では、市民ベースではどうか？というところ、関東や関西は上映機会が少しずつ増え、NPOだけでなく、地域文化振興会、社会福祉協議会、教育委員会、図書館等が主催でバリアフリー映画会が行われるようになりましたが、地方へ行くと全く上映機会がない！という所もざらです。ですから、シティ・ライツは市民活動団体という立場を生かして、各地のグループと手をつなぎ、市民の手で全国にバリアフリー上映の輪を広げる、ABCネット（Alljapan Barreafree Cinema Network）の活動にも力を入れていきたいと思っています。

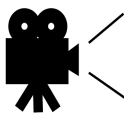
実は先日、予定より1年遅れで、やっとABCネットのサイトがオープンしました。このサイトを見れば、全国で開催されるバリアフリー映画会のスケジュールや、開催方法、バリアフリー上映をサポートしているグループ・団体情報が地域別にわかり、はじめてバリアフリー上映会を行うビギナーの主催者にも、地元グループや地元配給会社とうまく連携しながら、バリアフリー上映会を実施できるように情報支援をします。また、月1、2回更新でいろいろなタイプ・地域のバリアフリー映画会取材し、その映画会の特徴や魅力をご紹介するトピックスコーナーも設けました。このサイトの一番のターゲットは、「バリアフリー上映に興味はあるが、どうやって準備したらよいかかわからない。」という映画会主催者層ですが、もう一つは、各地で音声ガイドや字幕作りの活動をしているボランティアグループの持つノウハウ・コンテンツ、機材等をみんなで共有し、横のつながりをつくってより強固なサポート体制をつくり、バリアフリー映画会の開催を支援する。というものです。

シティ・ライツが岩波ホールやチネチッタなどの劇場とよい関係を築いて鑑賞会を継続実施しているように、横浜ではシネマジャック&ベティ×ヨコハマらいぶシネマ。埼玉では、シネプレックスわかば×声なびシネマわかば。浜松では、シネマイーラ×シーンボイス浜松。京都では、京都シネマ×京都リップル。大分では、シネマ5×バリアフリーライブシネマ大分がそれぞれ、地域のコミュニテ

イシナマやミニシアターなどよい関係を築いています。このような劇場と地域のボランティアグループのモデルの他、グループが行政や施設と連携して行った映画会のモデルなども多数紹介することで、それを読んだ同じような立場の人々が、よい意味でマネをしてくれるような形から、バリアフリー上映の輪が広がっていったらいいなと思っています。

先日「バリアフリー映画」のキーワード検索でネットサーフィンをしていたら、ラジオ沖縄のページにたどりつきました。番組の中で、昨年、「真夏の夜の夢」の音声ガイド付上映のお手伝いに行ってきた、あの桜坂劇場で行われている市民大学を紹介していたのですが、劇場支配人の真喜屋さんが、「今、桜坂市民大学で「バリアフリー上映を考える」というのをやっています。参加者みんなで、目の不自由な人、耳の不自由な人が一緒に映画を楽しめるようにするには、どんなことからはじめていいか、それぞれが持っているスキルでどんなことができるだろうか、みんなでアイデアを出しながら、いろいろ試している。」と話していました。

人のつながりとはすごいものだなーと、改めて感じました。こうしてバリアフリー上映が、人と人とのつながりの中で、地域コミュニティを豊かにするツールとして、どんどん広がっていったら素敵だなーと思いました。



活動報告

～同行鑑賞作品～

このコーナーでは、近日(4月～6月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・4月3日/花のあと/川崎チネチッタ
- ・4月4日/時をかける少女/シネスイッチ銀座
- ・5月9日/名探偵コナン 天空の難破船(ロストシップ)/ユナイテッドシネマとしまえん
- ・5月23日/のだめカンタービレ 最終楽章 後編/ユナイテッドシネマとしまえん
- ・6月5日/書道ガールズ/川崎チネチッタ
- ・6月6日/春との旅/川崎チネチッタ
- ・6月12日、20日/音の城♪音の海/渋谷アップリンクX
- ・6月19日/告白/ユナイテッドシネマとしまえん
- ・6月26日/RAILWAYS/川崎チネチッタ
- ・6月27日/座頭市 THE LAST/ユナイテッドシネマとしまえん



対談

映画って何なんだろう？問い続けて

— ドキュメンタリー映画「音の城♪音の海」公開

音の城♪音の海 -SOUND to MUSIC- 監督：服部智行

あらすじ：2005年、音楽家と自閉症やダウン症などの知的障害を持つ人、音楽療法家による即興演奏を目指す“音遊びの会”が発足。彼らは新しい音楽表現を生み出そうと、ワークショップを継続しながらホールなどで舞台活動を行う。年齢や個性も多種多様なメンバーたちは、さまざまな音楽家たちとコラボレーションしながら独自の音楽を作り出していく。

5月29日からの渋谷アップリンクXでの公開を前に大忙しの中、服部智行監督自らが音声ガイド製作に関わってくださいました。その検討会の帰り道、ガイド製作の一部とナレーションを担当していただいた瑞木によこさんと一緒にお話を伺いました。この作品を既にご覧になった方もこれからの方も、服部監督の映画への思いの一端を感じていただければ幸いです。

(ノンちゃん)

ノンちゃん:それではこれからシティ・ライツ会報に載せる対談をしたいと思います。宜しくお願いします。

まず、服部監督とシティ・ライツとの出会い辺りからちらっとお話いただけますか。

服部監督:僕が2年間映画の学校に行っていて、フィクションの映画学校だったんですが、そのころドキュメンタリーを撮りたいと思ってました。当時、映画に対してすごい思い入れがあって、映画って何なんだろうというところから問いかけたかったんですね。目が見えない人が映画を鑑賞する様子から、映画って何なのかを浮き彫りにできるんじゃないかなと思ってネット検索していて平塚さん(当時は稲葉さん)の活動を見つけたのがきっかけでした。

ノンちゃん:によこさんは「ドキュメンタリー citylights」はご覧になってませんか？

によこさん:まだ観てないんですけど、リーダーから、なんか大根が何かをえんえんと切りながらシティ・ライツの始まりを語った映画だとか聞いてます。(笑)

服部監督:あのドキュメンタリーが2002年ごろですから8年くらい経っていますね。

ノンちゃん:では、今回「音の城♪音の海」、こういうテーマを選ぼうと思ったのは？

服部監督:シティ・ライツとの関わりや仕事の関わりから音に興味を持っていて、音で楽しめる映画っていうのはどういう物なのかと考えている内に音楽療法を知りました。音によって変化して行く様子が映像で表現できたら、映画として面白いのではと思いました。

ノンちゃん:によこさんは今回ガイドを作ることになって、実際にやってみる前、そして作りながら感じたことはどんなことでしたか？

によこさん:最初、シティ・ライツのドキュメンタリーを作った奇特な監督の作品と聞いてそのイメージが先行したせいか、わりと軽く考えていたんです。実際に観たら「これどうやってガイド作ったらいいんだろう!」と思いました。ドキュメンタリーって削るところがないというか、全部が大事に思えてどこをガイドしていいのか悩んだり、そういうところが苦労しました。

ノンちゃん:私はシティ・ライツのドキュメンタリーもこの作品も両方観ているんですけど、「音の城♪音の海」の中で、ガイドなしで観ても一番よく分かったのが大友さんのことだったんですね。その突き詰める議論の様子を記録するところはシティ・ライツのドキュメンタリーにもあって、なんだか通ずる物を感じました。

服部監督:真剣に本質のところを突き詰めてるところには興味があるというか、ドキュメンタリーの面白いところだと思ってます。シティ・ライツにしても音遊びの会にしても団体が立ち上がったばかりのときの、お互いの価値観のぶつかり合うところに興味を持って取材をお願いしています。

ノンちゃん:監督が今回の作品の中で苦労した点は？

服部監督:今回は編集に悩みました。もともとのアイデアとしては、音で人が変化して行く様子を映像に収めようということだったんですが、はっきり言って何かが変わったところが見受けられない状況がずっと続いて、これは本当に映画になるのかと思いながら撮影してました。でも、最後の音の海の公演のとき、これは映画になるんじゃないかと思えて、編集に入ったわけですが、それを生かして作品にして行くのが大変でした。子どもたちの変化があまりにも細かいものなので、400本くらいの撮りためたテープを見直して、それをいかに編集して行くか、その見せ方に苦労しましたね。

ノンちゃん:私は「どっこいしょ～」のあやちゃんと石村さんのシーンが好きで、あそこにはすごい変化を感じましたよ。

ところで、によこさんは小さいお子さんをお持ちという立場から、この映画をどんな風に観てましたか？

によこさん:すごく正直にいうと、自分の子どもが障がいを持ってたらどうしてるだろうと思いながら観てて、あの中のお母さんたちみたいにできるかなって。最後の音の海の公演のときは、それまでの積み重ねを見てきているからこそ感動してるんだろうなあと観てましたね。

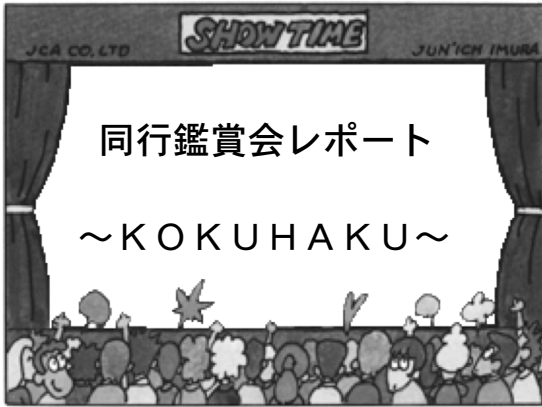
ノンちゃん:実は、明日、ナレーション収録があって、それから劇場でそれを観ることがあればまた感じることもあるでしょうね。

によこさん:きっと、そうだと思います。

ノンちゃん:さて、ではそろそろ、監督の今後のご予定など伺ってみたいと思いますが、いかがでしょうか？

服部監督:今丁度、商店街の映画を撮ろうという企画があって、助成金の申請をしているところです。それは、商店街にいるおじちゃんとかおばちゃんとかが出演して、なおかつプロの役者さんもいてという、ドキュメンタリーとフィクションが混ざったような映画を作りたいなあと企画してます。

ノンちゃん:どんな映画になるのか楽しみ。観た人がみんな元気になれるような映画になるといいかなと思います。そして、また音声ガイドがついてみんなで一緒に観られるといいですね。 それでは、どうもありがとうございました。



「告白」のライブガイドをやって

(池袋チーム: 船田久美子)

池袋チームでのガイドデビューは、08年の「ハッピー・フライト」を4人でリレー式にやったラスト30分弱でした。2回目が「告白」になるとは予想もせずびっくりです。清本さんと二人でやることになり、少しは荷が軽くなりましたが、本屋大賞を受賞した話題作にチャレンジする事はまた別のプレッシャー大です。主な出演者のほぼ独白で進む残酷な物語。影響を配慮すればR15になるのは当然でしょう。

ガイドを入れられる所は、少しはあるものの殆んどが台詞なのでどう入れるかは清本さんとも相談し二人で悩み、ある程度かぶるのは今回はやむ負えないのではと練習をしました。が、このかぶった部分に対し、会員の方から「あの時は、聞かせて欲しかったんだけど」と指摘されてしまいました。

映画の見方は十人十色、私が最初に見た時の素直な感想は前半は退屈、ガイドする者がこんな気持ちではいけないと反省し、切り替え、そしてどんなガイドをするか性根をすえて作品に向かっていきました。

見ていくうちに監督が意図し、思うところをしっかりと理解することは出来ないまでも、私は原作よりも映画のほうが面白いことに気がつきました。映像ならではの全体を印象づける抑えたモノトーン色調、松たか子の冷静な表情、またそれを装った演技とセリフ。ぞくぞくとする所もありました。

松たか子は監督の意図を表現したそうです。十数回のテイクの後で、一人夜道を歩くシーンは苦悩がにじんではじめましたが私のガイドで伝わったかどうかです。今回はガイドを書き上げずほぼアドリブでやり、ミスをしたところもありゴメンナサイですが、緊迫感と必死さは伝わったのではとも思います。

森口、修哉、直樹、直樹の母の言葉、行為にどんな“真実と正義”があるのか、「命の重さ」と残酷シーンとのアンバランスにはめげてしまいました。本当に重い内容の作品ですが観客動員数がNo1の話題作をガイドするチャンス与えてくださり感謝します。でも本音を言えば後味の良いものを見たいです。

『告白』 監督: 中島哲也 キャスト: 松たか子、木村佳乃、岡田将生 ほか

あらすじ: とある中学校の1年B組、終業式後の雑然としたホームルームで、教壇に立つ担任の森口悠子(松たか子)が静かに語り出す。「わたしの娘が死にました。警察は事故死と判断しましたが、娘は事故で死んだのではなくこのクラスの生徒に殺されたのです」教室内は一瞬にして静まりかえり、この衝撃的な告白から物語は始まっていく……。



特集

映画祭をめぐる～カンヌ映画祭を知ろう

第4回目です。今回は世界三大映画祭の最後のひとつ、カンヌ映画祭を取り上げたいと思います

<概要>(ウィキペディアより)

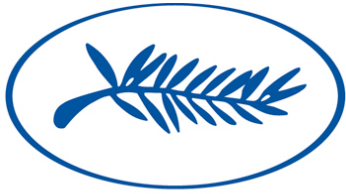
カンヌ国際映画祭はベルリン国際映画祭、ヴェネチア国際映画祭と併せ、世界三大映画祭の一つである。

1930年代後半、ファシスト政府の介入を受け次第に政治色を強めたヴェネツィア国際映画祭に対抗するため、フランス政府の援助を受けて開催される事になったのがカンヌ国際映画祭。1939年から開催の予定だったが、第二次世界大戦勃発のため中止。終戦後の1946年に正式に開始される事になった。

1948年から1950年まで、予算・会場設備の問題などから中止が相次ぐなど当初は混乱も見られたが、51年からは映画祭としての環境が整備され、世界最大の国際映画祭へと成長していった。

1968年にはパリの五月革命に呼応したゴダール監督らの実力行使により中止に追い込まれるといった事件が起きたり、あるいは79年には、審査委員長を務めた作家フランソワーズ・サガンから“審査に実行委員会から圧力が加かった”と衝撃発言が飛び出すなどカンヌはスキャンダルにも事欠かない。むしろ、様々なスキャンダルとともに成長してきた映画祭とも言える。

最高賞はパルム・ドールと呼ばれ、ノミネートされた20本前後の映画作品の中から選ばれる。二本以上の作品が選ばれる年もある。当初は最高賞を「グランプリ」としていたが、1955年にトロフィーの形にちなんで「パルム・ドール」(黄金の棕櫚)を正式名称とし、「グランプリ」とも呼ばれる形とした。1965年に最高賞の正式名称を「グランプリ」に戻すが、1975年に再度「パルム・ドール」としている。長らくカンヌにおいては「グランプリ」とは最高賞の正式名称もしくは別名であったが、1990年に審査員特別賞に「グランプリ」の名が与えられる事となり、混乱を招いている。



日本映画のパルム・ドール受賞作品はこちら

1954年 『地獄門』 衣笠貞之助監督

1980年 『影武者』 黒澤明監督

1983年 『楢山節考』 今村昌平監督

FESTIVAL DE CANNES

1997年 『うなぎ』 今村昌平監督

<補足> 今回取り上げたカンヌは世界で最も権威と影響力のある映画祭です。カンヌでの成功をスタートに、大監督となっていった人は数多く、北野武監督もその一人です。ただ個人的には、パルム・ドール受賞作品で自分のツポにはまったものは殆どありません。日本で興行的に成功したのもあまりなかったはず。おそらく『ダンサー・イン・ザ・ダーク』が最大のヒットかな。粗筋よりも審美的な作品が選ばれることが多いから、自分のフィーリング・ポイントに合わないのかもしれない。

これまで4回、映画祭について調べてわかったのですが、映画って政治に利用されてきたのですね。国家の権威を示すためとか、社会主義に対抗するためとか。映画という総合芸術のよさを伝えたい、広げたい！！というのは二義的理由であり、建前であったことがわかります。1映画ファンとしてはお祭り気分映画祭を楽しんでいます。スタートは政治とか戦争であったということを強く意識しておきたいと思います。

(吉川 俊平)

勝手におすすめシネマ Vol.13 『インビクタス／負けざる者たち』

南アフリカでサッカーワールドカップが開催されましたが、今から15年前の1995年、同じく南アフリカでラグビーワールドカップが開催され、歴史を大きく変える“奇跡”が起きたのを、皆さんご存知でしょうか？

『インビクタス／負けざる者たち』(2009年)

監督／製作:クリント・イーストウッド 出演:モーガン・フリーマン、マット・デイモン、他

1994年、南アフリカ共和国初の黒人大統領となったネルソン・マンデラ(モーガン・フリーマン)は、新政権の下を去ろうとしていた白人職員たちを集めて語りかけた。「“過去は過去”だ。皆さんの力が必要だ。我々が努力すれば、我が国は世界を導く光となるだろう。」

対立する黒人と白人をひとつにして“虹の国”をつくる、それがマンデラの願いだった。

ある日、アパルトヘイトの象徴となっていた南アフリカのラグビー代表チーム“スプリングボックス”をつかった変革を思いついたマンデラは、チームの主将であるフランソワ・ピナルル(マット・デイモン)をお茶に招待し、獄中で、自らに立ち上がる力を与えてくれた詩

について語った。大統領の真の目的を理解しはじめたピナールは、ワールドカップに向けて、これから起こるであろう“奇跡”に向かって、新たな歩みをはじめたのだ。

政治というのは何のためにあるのでしょうか？

選挙のために政治があるような日本の社会に埋もれていると、理想社会というのはあくまでも理想であり、永遠に見ることのできない夢のように思えてなりません。“奇跡”なんて起こりっこない、そう思えてなりません。

残念なことに、マンデラが引退した後の南アフリカは、あまり好ましくない状況に陥っているとのこと。マンデラとスプリングボクスが起こした“奇跡”は、つかの間の夢だったのか……。

でも、つかの間の夢だろうが、“奇跡”は起きるのだ、起こせるのだということを証明したことには違いないのです。この“奇跡”は永遠に語り継がれ、人々の勇気の源となるでしょう。

「私は我が運命の支配者 我が魂の指揮官なのだ」

マンデラの信念の根底にあるこの言葉を、私たちが強く心に刻んで生きていきたい。

(大田悠子)



思い出の映画

—思い出は、名画とともにいつまでも—。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。と思います。

皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

映画との出会い

(みみすけ)

私の思い出の映画、それはチャールズ・ディケンズ原作の「クリスマス・キャロル」です。何回もリメイクされている名作でご存知の方も多いでしょう。ジム・キャリーも昨年主役スクルージ(をはじめ7役も)を演じましたね

クリスマスの夜、たった一人の友人の亡霊の訪問の後、3人の精霊が主人公スクルージを訪ねます。一人は過去を彼に見せる為に、一人は現在の自分の姿を見つめさせる為に、そしてもう一人は……

この映画は、私が最初に見た映画です。姉が小学校の頃試写会のチケットを応募で入手したのがきっかけで映画館に出かけて行きました。家族4人、私は4才くらいで母の膝に座って映画を見ました。その頃の記憶などあまり覚えていないのですが、亡霊が死後の世界へと空を飛ぶシーンは怖くて泣いたことをいまだによく覚えています。1970年作、ロナルド・ニーム監督のイギリス映画(原題はスクルージ)。ミュージカル映画なので、楽しい時は楽しい気持ちを素直に表していて、そんなところも映画らしい映画だと私は思うのです。

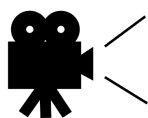
原作者チャールズ・ディケンズはお金に恵まれない家庭に生まれ、苦勞しながら育ちました。小さい時から働き、15才で法律事務所に通い、後に新聞記者をしながら執筆活動に励みます。そんな彼の中で次第に表われていく想いとは、「この世の差別は無知と貧困がもたらすものであり、博愛なる精神こそがこれに打ち勝つという思想だった」。どこかで、そう批評されているのを読みました。クリスマス・キャロルはそんな彼の社会変革への想いが色濃く表れている作品なのだそうです。

実は数年前にこの映画のDVDを購入し毎年クリスマスの頃にこの映画を見てます。「本当に心の底から願えば、人はいくつになっても、きっと成りたい者になれる」、見るたびに、自分とスクルージを照らし合わせながら、この作品はいつも、そんな希望を私に与えてくれます。



『クリスマス・キャロル』監督:ロナルド・ニーム

あらすじ:19世紀半ば。クリスマス・イブを迎えたロンドンの街は活気にあふれていた。が、スクルージの事務所だけは、別世界。ケチで思いやりのない老人スクルージは、唯一の雇い人クラチットにも、1日だけしかクリスマス休暇を与えない。そしてこんな時でも、いつものように借金の催促に余念がない。街の人々からの悪口をよそに、スクルージが帰宅するところから、自分を呼ぶ恐ろしい声が聞こえてきた。それは7年前に死んだ共同経営者マーレイの声だった。姿を現し、地獄の運命から逃れるチャンスを1度だけくれると言うのだ。やがてスクルージの前に”過去のクリスマスの幽霊””現在のクリスマスの幽霊””未来のクリスマスの幽霊”が順番に現れた……。



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2010年4月1日～2010年6月30日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員]・福田和利(東京都江戸川区在住)・柳田知子(神奈川県横浜市在住)

・佐伯 功(東京都府中市在住)

[賛助会員]・野村美恵子(東京都渋谷区在住)・松木康司(大分県速見郡在住)

■ 岩波ホールで『パリ20区、僕たちのクラス』の音声ガイド付き上映を行います！

日時: 7月26日(月曜日) 上映開始:18時30分～(映画は128分です。)

集合: 17時50分 岩波神保町ビル1階エレベーターホール(神保町駅A6出口直結)

鑑賞料: 1400円。(晴眼者も一律)

ガイド方式: 音声ガイドと字幕朗読は収録形式で行います。ラジオは、FM周波数88.5MHzに合わせてください。

【作品介绍】舞台は、パリ20区にある中学校の教室。カメラが追いかけるのは、1年間の国語の授業。弾けるような笑い抑えられない怒りが、分刻みに交錯する多感な24人の生徒たちと、教師とは何かを模索し続けるフランソワは、この1年間でいったい何を学ぶのかー? 第61回カンヌ国際映画祭(最高賞)パルム・ドール受賞作品。

【申込締切】7月21日 24時

※お申し込みは、同行鑑賞受付窓口doukou@citylights01.org または、シティ・ライツ事務局(03-3917-1995)までお願いします。

■鎌倉市川喜多映画記念館で『父と暮らせば』の音声ガイド付き上映を行います！

川喜多長政・かしこご夫妻は、昭和の初期に東和商事を設立し、「天井桟敷の人々」(1952年)、「禁じられた遊び」(1953年)などの海外の名画を輸入・配給した他、戦後の混乱期には、多くの日本映画を海外に紹介し、国立フィルムセンターの設立にも貢献した、日本の映画大使と言われるご夫妻です。その生涯を通して映画愛した、川喜多長政・かしこ夫妻の旧宅跡に、「鎌倉市川喜多映画記念館」がオープンしました。記念館では、映画上映だけでなく、映画資料の展示や、映画人を招いて講演会やワークショップも行っており、その運営は、シティ・ライツ映画祭にも毎年ご支援いただいている川喜多記念映画文化財団が行っています。

その川喜多映画記念館で、9月5日(日)に黒木和雄監督の『父と暮らせば』を音声ガイド付きで上映するが決まりました！

旧川喜多邸には、アラン・ドロンや、フランソワ・トリュフォー監督のほか多くの映画人が訪れたと言われています。1973年のフランス映画祭開催時にはここで、盛大なパーティーが開かれ、当時鎌倉在住だった田中絹代も参加して歓談している写真が残っています。他にも、インド映画界の巨匠サタジット・レイ監督や、ギリシャ映画の名匠テオ・アングロプス監督なども訪れたそうです。

そんな素敵で、音声ガイド付き上映が実現するなんて夢のようですね。

記念館は、鎌倉の観光名所、鶴岡八幡宮のすぐ側です。鎌倉観光も楽しみながら、みんなで観に行きましょう。上映時間や申込方法などの詳細が決まりましたら、メールリスト等でお知らせ致します。どうぞ、楽しみにお待ち下さい！





編集後記

編集スタッフ・イラスト描きやレイアウトデザインの
スタッフも大募集！希望の方は会報編集課まで！

(会報編集課 ノンちゃん)

梅雨真っ盛り。毎年この季節になるとなんだか調子が出なくなります。本気で梅雨のないところに移住したいと思うほどです。これって、花粉が飛ぶ季節に、杉のない地域に行きたくなる人たちと通ずるものなのかもしれませんね。

そんな中、今年は周囲でけがをしたり、病気で入院される方が何人もいて、びっくりしたり、心配したり、ほっと胸をなでおろしたり、ちょっぴり忙しいことでした。でも、これは私への警告でもあるのかなと思う今日この頃です。

こんなときには、すかっとする映画に出会いたいものです。何かいい作品はないかなあ…。今日も携帯サイトで検索を試みしてみました。

(会報編集課 大田)

夏が来ると、タイ料理にビール、あるいは、沖縄料理に泡盛、というコンビネーションが急激に恋しくなります。

というわけで、先日早速タイ料理を食べに行きました。しかも、平日の昼間から！青パイアのサラダとチキンのサテを頬張りながらシンハービールでのを潤す。ん～、サイコー！！エアコンを効かせることのできないテラス席だったので、それはそれはビールがおいしく感じられて、どんどん飲めちゃうんですね。ああ、また行きたい！

でも、今度は沖縄料理を食べに行かねば！ラフティーが私を待っている！！

(会報編集課 吉川)

みなさんこんにちは、半年ほど前から月に一度読書会に参加しています。読書会って何かというと、課題の本を決め、当日までにその本を読んでおいて、内容についてそれぞれが感じたことを語り合う集まりのこと。僕は本好きなので、自分の読書を豊かなものにしたという思いからこのイベントに参加しております。先月の課題図書はフラニーとゾーイ(サリンジャー)、今月は悲しみよこんにちは(サガン)でした。意見や感想を出し合うというのは本当に面白いし、読んだらすぐ忘れていくという自分の貧弱すぎるリーディング力が少しアップしたかなと感じています。息を吸ったらはくように、食べた後排泄するように、インプット(読書)した後のアウトプット(意見を出す)って大切なんだなと改めて思いました。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は10月10日。投稿される方は、9月第2土曜日までお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2010年夏号 07月10日発行 編集：吉川俊平、斉藤恵子、大田悠子
発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL http://www.citylights01.org

